
魔人ニート 平成天魔大戦

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔人ニート 平成天魔大戦

【Nコード】

N6229J

【作者名】

統合失調症無職青年

【あらすじ】

二〇〇九年八月の衆議院総選挙で誕生した主民政権は外国人参政権付与法案を提出する。それに反対する右翼ニート・岩崎文太は、主民党本部や首相官邸への襲撃を決意し、試しに悪魔を召喚してみることにした。その時、主民党の闇部隊が岩崎を襲う！悪魔と天使、魔人と使人との死闘が今、始まる！

第一章 憂国の右翼ニート、悪魔を呼びだす

「もうオカルトの類に頼るしかないか」

岩崎文太は呟いた。現在、岩崎は二十歳の無職である。岩崎にはある政治信条があった。それは、世に言う右翼思想であった。そのような思想をもつ岩崎にとって、目下の関心は与党・主民党が推進する外国人参政権付与法案であった。外国人参政権とは、その国家の国籍をもたない外国人に付与される参政権のことである。

（この法案だけは、何として阻止しなければならん。さもなくば、神国日本は解体されてしまう。こんなものを成立させれば、日本は朝鮮人・韓国人・シナ人という特定アジアに支配され、特アの属国・植民地になることは避けられない）

それにしても、と思う。

（去年の衆議院総選挙で主民党があれほど大勝するとは、意外だった。あんな反日極左売国政党のどこがいいんだ。まだ、民自党の方がましじゃないか。まあ、俺が支持するのは国家改造政党神風だが）

主民党は中道左派リベラル、民自党は保守中道右派、国家改造政党神風は極右の政党であった。

（民自党も神風もあまり当てにはできん。もはや、俺が何とかするしかない。他の誰が何と言おうと、俺は俺の正しいと思う道に突き進むのみ）

岩崎は悲壮な覚悟を決め、部屋の隅に置いてあった木刀を手にし

た。これは特注品で、普通の木刀よりは太く長い。それだけ頑丈である。岩崎は、この木刀を武器に、主民党本部や首相官邸に殴りこみをかけるつもりだった。むろんひとりである。

（その前に悪魔召喚でも試しておくか）

岩崎はふと、以前ネットで見た悪魔召喚の方法を思い出し、それを実行してみることにした。

（確か、悪魔の名前を呼ぶだけでいいんだっただな。悪魔、悪魔ってどんな名前のが居たんだっけか？ とりあえず、サタンでも言ってみるか）

「サタン、サタンよ、我に力を与えたまえ。我と契約を結べ」

何も起こらない。もう二、三度やってみる。やはり、何も起こらない。

（何もないじゃないか。やはり、ただの迷信か）

そう思ったが、最後にもう一度名を呼ぶことにした。

「出でよサタン」

第二章 主民党の刺客との戦い

突然、ガラスの割れる音がした。

「何だ？」

岩崎は木刀を握りしめた。

ベランダの方のようだが

岩崎は両親とともに社宅に住んでいた。ふすまを開け、部屋の外の様子を窺う。すると、スーツ姿の男たちが刀を提げて、数名、土足で室内に入ってくるのが見て取れた。

「だ、誰だ、お前たちは！？」

岩崎は動揺を隠しきれずに、男たちに誰何した。先頭の男が答える。

「我々は主民党の者だ。ここで悪魔召喚儀式をやり、悪魔と契約を結び、我々を脅かそうとしている貴様を始末しにきた」

「な、なんだと！？」

「我々主民党は神と天使の使い。哀れな人類を導くと神界・天界から約束された者。それに刃向かう愚か者には、みな死んでもらう！貴様も死ね！」

言うやいなや、抜刀し、岩崎に斬りつけた。

「う、うわ!？」

岩崎は木刀で何とか受け止めた。

「てやーっ!」

スーツ姿の男が岩崎を蹴り飛ばした。岩崎は後方へ吹き飛ばされた。

「ぐはっ!」

「死ねっ!」

男が刀を振り上げた。

(や、やられる。もうだめだ)

「諦めるのが早いな、人間。もっと抗って見せたらどうだ?」

「その声は、悪魔か!？」

岩崎に斬りつけようとした男が、動きを止め、驚きの表情を浮かべている。

「岩崎文太とやら、俺らと契約を結ぶのではなかったのか?」

声はすれども姿は見えずとは、まさにこのことだった。

「本当にサタンなのか?」

「そうだ。それで、契約をするのか、しないのか」

「け、契約する！」

「くくく、いいだろう」

その瞬間、岩崎の体に力がみなぎってきた。

（これがサタンの力なのか。力がみるみる湧いてくるぞ。これなら、勝てる！）

「どらああああああああ！ 主民党の刺客ども、これをくらえー！」

岩崎は眼前の男に向かっていった。

第三章 愛国魔人と沢尾ガールズの対決

岩崎文太は木刀をスーツの男目掛けて振り下ろした。男はそれを真剣で受けた。

「な、何!？」

男の刀は真つ二つに折れてしまった。うろたえたところを、逃さずに岩崎は男の頭を打った。鈍い手ごたえがあり、木刀が男の頭に食い込み、頭部は陥没し、両目が飛び出ている。

「き、貴様っ!」

一人目がやられたのを見ていた二人目の男が、岩崎に斬りつけた。岩崎は男の刀を余裕で受け止めた。返す刀で二人目の面を打った。またしても、頭はぐしゃりと潰れ、目玉が飛び出した。

「ひ、ひえーっ!？」

三人目はびびって逃げ出した。と、逃げる男の首が飛んだ。

「逃げるんじゃないよ。こんなデブニート相手に、情けないね」

スーツ姿の女が現れた。それも一人ではない。全部で四人いる。

「お前たちは!？」

「あたしたちのことを知っているのか。そりゃあそくだよね、あたしらは有名人だから」

「お前は主民党衆議院議員・田福衣里子」

「そうよ。他の三人は、青森愛、中田美絵子、小田和美。人呼んで、沢尾ガールズ！ 沢尾一郎先生のご命令により、貴様を抹殺する！ 死ねっ！」

沢尾一郎は主民党幹事長で日本政界最大の实力者と言われている政治家だが、昨今は土地購入問題で東京地検特捜部の捜査を受けていた。言い終わると、田福が必殺の一太刀を岩崎に浴びせたが、これも岩崎は難なく木刀で受け止めることができた。

「何ですって！？ あたしの必殺剣が！？ 馬鹿な……」

田福以下、沢尾ガールズは目を剥いた。

「岩崎、安心しろ。こいつらは使人・沢尾と契約を結んだ使徒だ。魔人となったお前と比べると、ワンランク劣る連中だ」

サタンの声が部屋にこだまする。

「使人？ 使徒？ どういうことだ？」

「説明はあとだ。まずはこいつらを始末しろ。お前なら苦もないはずだ」

「よし！ 反日極左売国奴ども、覚悟しろ！ 愛国戦士・岩崎文太、参る！」

岩崎は飛び上がると同時に、田福の額を打った。田福は声もあげ

ずに即死した。次に、青森を袈裟がけに叩く。青森の肩が砕け散る。片膝ついた青森の頭を狙う。脳漿を飛び散らせて青森は死んだ。とても敵わないと思ったのか、中田と小田が背を向けて逃亡し、ベランダから外へ出た。

「待て！」

追いつがり、小田の後頭部を打った。スイカのように頭が割れ、小田の体はその場に倒れた。なおも逃げ続ける中田を追い、追いついてこれも後頭部を打つ。またも頭が潰れ、中田の体は動きを止め、どうと倒れこんだ。

「勝った！ 勝ったぞ！」

岩崎は息を切らせることもなく、勝利の余韻に浸った。

第四章 使人・沢尾一郎

主民党幹事長・沢尾一郎は東京都世田谷区の自邸で、沢尾ガールズの気配が消滅したことを、自身の使力で知った。

（田福衣里子、青森愛、中田美絵子、小田和美の気配が消えた！？
どういうことだ！？ まさか、返り討ちに遭ったというのか？
仮にも、この沢尾一郎の使徒だぞ。ありえん、まさかこんなことが
あり得るはずがない）

沢尾はいつまでも四名の敗北を認めず、否定し続けていた。

岩崎文太は襲撃者たちの死体を自室へ運びながら、サタンの「天使講義」を受けていた。

「それで、この世には悪魔だけでなく、天使も存在するというわけだな」

「そうだ。天使と契約を結んだ人間のことを使人という。さらに、その使人と契約を結んだ者を使徒という。ちなみに、悪魔と契約を結んだ人間を魔人、その魔人と契約を結んだ者を魔徒と呼ぶ」

「ふうん。説明感謝する。それで、今後のことだが」

「沢尾一郎邸へ行くんだろ？」

「よくわかったな」

「それくらいわかるさ。よし、俺が運んでやるう」

「運ぶって？」

「いいから、さっさとその血で汚れた木刀を持て」

「了解」

気がつくと、一瞬で岩崎は違う場所へ移動していた。

「ここが沢尾邸か？」

「ああ。ほら、さっさと殺しに行けよ」

「おお」

「ちょっと君、何してるのかな？」

沢尾邸を警備しているとおぼしき制服警察官が聞いてきた。よく見ると、警備の警察官は二十人は居る。パトカーも停まっていた。

「でいやっ！」

岩崎は警官の即頭部を木刀で殴りつけた。

「ぼぶっ！」

殴られた警官は、悲鳴を上げて吹っ飛び、動かなくなった。

「警察官だろうが何だろうが、反日極左売国奴成敗の邪魔をする者は、死んでもらう!」

「貴様っ! 逮捕する!」

警棒を手に、警察官が一斉に駆け寄ってくる。

「いいぞ岩崎。こいつらはどうやら全員お前に殺されたいらしいぞ。お望み通り、皆殺しにしてやれ。くくくくく」

第五章 愛国魔人の警官殺し、書生殺し

岩崎は警官の脳天に会心の一撃を加えた。あと十八人。

「武器を捨てろ！ 捨てないと撃つぞ！」

数名の警察官が拳銃を構え、岩崎を狙っている。岩崎は、かまわず拳銃を手にした警官に向かっていった。

「構わん、撃て！」

パンパンパンと乾いた発砲音が響く。だが、いずれも岩崎には当たらなかった。岩崎は超高速で移動していたためである。

「我はサタンと契約を結びし愛国魔人岩崎文太！ 拳銃など我には利かぬ！」

岩崎はそう高々と宣言すると、超高速で次々と警官の頭を叩き割っていった。あっという間に警備の警官を片づけると、立派な沢尾邸の門をひょいと飛び越え、侵入した。

「たのもう！ 我は刺客・愛国魔人岩崎文太である！ 外国人参政権を推し進める反日極左売国奴・沢尾一郎を成敗しに、ここに参上した次第！ 警備の警察官は一掃させてもらった！ 次は沢尾一郎の首を頂戴する！」

（来たか）

沢尾一郎は自室で岩崎の口上を聞いていた。書生が息を切らせて部屋に駆けこんできた。

「先生、闖入者です。ここは我々が防ぎますので、その間にお逃げ下さい」

「いや、私は逃げない。これでも天使ミカエルと契約を結んだ身。賊の一人や二人、返り討ちにしてくれよう」

「先生、しかし」

「くだい」

「とうやっー!」

岩崎はジャージ姿の沢尾一郎の書生と戦っていた。しかし、書生の劣勢は明白で、岩崎の木刀さばきに敗れ、次々と屍を晒していった。岩崎は書生との戦闘を続けながら、徐々に邸内を進んでいた。とうとう抵抗する書生もいなくなった。

「どこだ沢尾一郎。尋常に勝負しろ!」

手当たり次第に部屋をあらためていくが、沢尾の所在はようとして知れない。

「くそっ！ どこにいるんだ！ もしや逃げられたか？」

「慌てるな岩崎。また俺が沢尾の居場所に連れて行ってやるっ」

「それはありがたい！ 早くしてくれ！」

第六章 主民党幹事長との戦い

岩崎がサタンの力で瞬間移動すると、主民党幹事長・沢尾一郎は
暮を打っていた。

「お前が岩崎文太か」

「そうだ。我こそは愛国魔人・岩崎文太！ シナ・韓国・北朝鮮と
いう特定アジアの走狗となり、外国人参政権付与を推進する、真正
極左反日売国奴・沢尾一郎！ 東京地検特捜部の逮捕を待つまでも
ない、この俺が成敗してくれる！ 覚悟！」

「何の罪もない警察官や私の書生を殺しておいて、何が愛国魔人だ。
お前はただの狂人に過ぎん」

「黙れ！ 俺は愛国者だ！」

岩崎が唾を飛ばして力説した。

「愛国者か。ほう。お前は大した男だな。愛国者なら、何をしても
許されると思っているのか？」

「愛国無罪だ！」

「愛国心など古臭い。これからは愛人類心、愛地球心だ」

「何が愛人類心、愛地球心だ！ おしゃべりは終わりだ。俺の暗殺
剣を受けてみよ！」

「そうだな。お前とのおしゃべりも何の利益もないとあきれていたところだ。望むところ。大事な書生の仇を討たせてもらうぞ！ たあっ！」

叫ぶや、沢尾は握っていた碁石が岩崎を狙って飛んできた。

「なんの！」

岩崎は余裕でかわす。

「ほう。そうか。ならば、これはどうだ」

今度は沢尾は大量の碁石を岩崎に向けて投げた。

「とおりゃあっ！」

岩崎は気合を入れると、木刀でひとつひとつ叩き落としていく。

「最後はこれだ！」

沢尾は碁盤を投げてきた。岩崎は渾身の力を込め、碁盤を叩く。すると、碁盤が真っ二つに割れた。

「お前、俺を馬鹿にしてんのか？ 碁石や碁盤を投げて、何がしたいんだ？ そんなもので、この俺が倒せるとでも思っているのか？ なめやがって！ ぶっ殺してやる！」

岩崎は青筋を立てて激昂した。

「ふつ。悪かったな。ちょっと遊んでやったまでよ。今から本気を

出してやる！ ミカエルよ、この老体に乗り移り、魔人岩崎文太を倒せ！」

「ミカエルか。気をつける岩崎、沢尾は自分の体に天使ミカエルを憑依させようとしている」

「何！ ミカエルって誰だ！？ そいつ強いのか？」

「さあな。とにかく、このままではお前は確実に死ぬ。俺にお前の体を憑依させなければ、な。どうする？ 俺にその体、預けてみるか？」

「言うまでもない。憑依には憑依。しばらく、お前にこの体、預けてやるぜ。その代わり、絶対沢尾を倒せよ？」

「いいだろう」

第七章 主民党幹事長死す！

「はあああああああああああつ！」

沢尾一郎が力んでいる。岩崎は沢尾一郎から強力な魔力を感じた。

「何だかとてもない力を感じるぞ。どうして俺はこんな感覚をもつてるんだ？」

「それはお前が俺と契約を結んだからだ。魔人となれば、自然と魔人や使人、魔徒、使徒の気配を感じることができるようになるのだ」

「そういうことが」

「何をごちゃごちゃとしゃべっている？ 岩崎文太、貴様はここで殺す！ たあつ！」

沢尾がかけてあった刀を手に取り、抜刀して岩崎に襲いかかった。

「来るぞ。サタン、頼んだ」

「任せておけ」

「サタン、またそろ何か企んでいるようだな。今度は何をするつもりだ？」

沢尾の口を借りて、天使ミカエルが訊ねた。

「お前には関係ないことだ、ミカエル。お前ら天使こそ、まだ哀れ

な人間どもに加担して、自分たちの都合がいい世界を創出しようとする目論んでいるらしいじゃないか」

「我々天使は人類を正しく導いているだけだ。貴様ら悪魔こそ、本来善なる存在である人間を悪に誘う元凶。今、その手先となっている邪悪な人間をひとり、この世から消し去ってやろう。この私自らの手でな」

岩崎は沢尾の攻撃をかわした。沢尾は追いつがる。

「きいえええええっ！」

速く激しい斬撃だが、沢崎は回避していく。

「おい、よけているだけじゃないか。はやく反撃しろ」

岩崎はいら立っていた。

「まあそう慌てるな。俺に作戦がある」

岩崎とサタンが話している間も、沢尾は攻撃の手を緩めない。

「ちいええええええええっ！」

岩崎はなおも沢尾に斬りかかることなく、回避に専念した。

沢尾の一方的な攻撃と岩崎の回避戦法が十分ほど続いた。

「ちょこまかと避けおって。そんなことで勝てると思っているのか？」

「ふつ。そろそろだな。気付かないか沢尾？ お前はもう、死んでいる」

岩崎は不敵に笑う。

「何を戯言を。ぐ、ぐはっ!？」

信じられないという顔で、沢尾は吐血し、苦悶した。

「な、なぜだ？」

「沢尾一郎、貴様はもう六十八歳。その老体に激しい戦闘が耐えられるわけもない」

沢尾は仰向けに倒れた。

「中田角栄先生、丸金信先生……」

沢尾は恩師二人の名を呼び、息絶えた。

「くそつ。敗れたか」

「残念だったなミカエル。所詮、お前ら天使は俺らに敗れ去る運命にあるのだ。お前らは元悪魔の転向者なのだから、魔王であるこの俺に勝てるわけもない」

「黙れサタン。まだ我らは負けたわけではない。この日本には、まだまだ使人や使徒がごまんというわ。戦いはこれからだ、サタン」

「消えたか」

「おい」

岩崎が不安そうな顔をしている。

「何だ？」

「俺の体は大丈夫なんだろうな？」

「安心しろ。お前はまだ若い」

第八章 主民党本部襲撃

「さて。次はどこに行く？」

サタンは岩崎に次の行き先を聞いた。

「そうだな。……主民党本部でもぶっ潰すか」

「主民党本部だな。わかった」

次の瞬間、岩崎は千代田区永田町の主民党本部前にいた。門のところで、守衛がひとり立っている。

岩崎は大きく息を吸い込むと、大音声を発した。

「我こそは魔王サタンと契約を結びし愛国魔人岩崎文太！ 憂国の精神の発露を見せてくれる！ 外国人参政権を推進する自虐史観の反日極左売国政党主民党は今日が最期だ！ この維新者・岩崎文太が終わらせてやる！ 今日が平成維新の日となる！ 我は平成維新の先駆けとならん！ でややややややっ！」

岩崎は何やら無線機に話し込んでいる守衛目掛けて突進を開始した。守衛は警棒を手にし、身構えている。

岩崎は跳躍すると、守衛の頭を木刀でしかと打った。頭をかち割られた守衛は前のめりに倒れこむ。それを見届けることもなく、岩崎は突進を続ける。

岩崎は目に入るものは手当たり次第に打った。頭、肩、首筋、後

頭部、即頭部、とにかく打った。逃げる者も後を追ひ、打ち殺した。岩崎の犯行には情け容赦がなかった。こいつらは日本を滅ぼそうとする反日極左売国奴なのだ。情けは無用である。岩崎は主民党本部に働く者すべてを虐殺する腹積もりだった。老若男女問わず、打ち殺す。反日極左売国奴には、死あるのみ。

それは一方的な殺戮、まさに虐殺だった。岩崎は自分がいったい何人殺したのか、まるで数えていなかった。とにかく打ち殺した。

この日、与党主民党本部に勤務する人間すべてが殺された。その数は三桁を数えた。

たった一人で主民党本部を壊滅させた「平成維新」の先駆者・岩崎文太は満足気であった。

第九章 国会襲撃！ 衛視狩り

「今度は国会に俺を連れて行ってくれ。今頃は本会議の最中のはず。この機に主民党国会議員をみな俺が粛清してやるっ」

「わかった。国会議事堂だな」

岩崎は荘厳な扉の前に立っていた。

「ここは衆議院本会議場だ。存分に暴れるがいいぞ、岩崎」

突然血痕のついた木刀を持った男が現れたので、衛視がぽかんとした顔をしている。岩崎は奇声を発しながら、まぬけ面をしたその衛視の頭を打った。

「どあっ！」

頭が割れ、脳味噌が辺り一面に飛び散った。周りの衛視たちは一瞬何が起こったのか理解できず、呆然としている。岩崎はひとりひとりと、衛視の頭をかち割っていった。丸腰の衛視を打ち殺すのに、岩崎は何の躊躇いも感じなかった。なぜなら、自分は愛国者・平成の維新者なのであり、これは憂国の義拳に他ならないからであった。ものの数分も立たずに門前の衛視を皆殺しにした岩崎は、頑丈そうな門を開き、本会議場へ入場した。

主民党代表にして内閣総理大臣・山鳩由紀夫が登壇し、原稿を読んでいる。岩崎は、山鳩を目標に走り出した。

「我こそは愛国魔人岩崎文太なり！ 我は平成維新の先駆者にして、

憂国の義拳を行う武士なり！日本人であるにもかかわらず、シナ・韓国・北朝鮮という特定アジアに隷属し、外国人参政権付与を推進する反日極左売国奴の首魁・山鳩由紀夫、御命頂戴仕る！」

山鳩が岩崎に気づき、一瞥をくれる。不思議なことに山鳩は取り乱すことなく、なおも原稿を読み続けていた。岩崎は山鳩に急接近し、間合いを詰めると、木刀を振り上げた。

「天誅！」

だが、木刀が山鳩の頭を砕くことはなかった。口原一博総務大臣が椅子を盾にして木刀を受け止めていたからである。

「総理、ここは私に任せて、早急に避難を！」

「わかりました。宜しく頼みますよ」

山鳩は原稿を手にして、悠然と去っていく。

「山鳩、待て！」

「お前の相手はこの口原一博だ！」

「くそがつ！」

暴漢の出現に、議場は騒然となった。国会議員たちが次々と急ぎ退出していく。

第十章 総務大臣口原一博暗殺！

「口原、邪魔しやがって。てめえみたいな濃いブサイク顔、簡単にぶち殺してやるわ！」

岩崎は啖呵を切った。

「貴様のような下賤の輩を倒すのに、天使の力を借りるのは少々口惜しいが、致し方あるまい」

口原はスーツを脱ぎ、ネクタイを外し、ワイシャツの袖をまくった。

「天使ガブリエルよ、この身をお前に捧ぐ。愛国魔人岩崎文太を滅せよ！」

「今度はガブリエルか。おいサタン、今回も勝てるんだろうな？」

「誰に口をきいている？ 俺は魔王だぞ？ 天使如き、屁でもない。俺にかかれば、瞬殺だ」

「おしゃべりは終わりだ！」

口原が鋭い蹴りを放った。たまらず、岩崎は木刀で受けた。

「な、なんだと！？」

何と木刀が二つに切断されてしまったのだ。

「マスコミには話したことはなかったが、私は柔道三段・剣道三段・少林寺拳法三段・空手三段の腕前でね。悪いが、貴様を倒させてもらうよ。はいやーっ！」

口原がパンチを放ってくる。

「う、うおっ!？」

岩崎は口原の激しい攻撃に防戦一方となった。

「こ、こいつは手強いぞ、サタン。沢尾のようにはいきそうもない」

岩崎は焦りの色を浮かべた。

「そのようだな。沢尾のように自滅を誘うことは難しそうだ」

「はっはっはっはっ、私は体を鍛えているからな。沢尾先生のようにはやられないさ。ほらほら、どうした、どうした」

口原は次々と矢継ぎ早にパンチやキックを繰り出してくる。そのたびに、岩崎はただ避けるだけだった。

「そんなことで私に勝てるのか？ はっはっはっはっはっ」

「口原、随分とまた楽しそうだな」

サタンが岩崎の口を介して言った。

「ああ、楽しいね。お前のような低俗な狂信的糞右翼崩れの魔人をいたぶることほど、楽しいことはない」

「なら、もう十分楽しんだろう。……そろそろいいな。おい岩崎、割れた木刀を拾え」

「こんなもの、何に使うんだ？」

「いいから拾えよ」

「くっ。無理だ、口原の攻撃が激しくて、とてもそんな余裕はない」

「そうか。仕方ない。よく見とけ、岩崎」

突如、二つに折れた木刀が宙に浮いた。かと思うと、口原に向かって飛んでいった。

「うげばっ！？」

口原の体に、真つ二つになった木刀が突き刺さっている。

「何をした？」

口原は大きく目を見開いている。

「力を使っただけだ」

サタンが岩崎の口を通して答えた。

「汚いぞ」

そう言うと、口原は背中から倒れ、絶命した。

「勝負に汚いも糞もない。天使に似たのだろうか、使人というのは、甘ちゃんだな」

「何という奴だ、サタン。ここまでのるか」

天使ガブリエルがサタンを非難した。

「居たのか、ガブリエル。なぜ口原に加勢しなかった？ 高みの見物でも決め込んでいたか？」

「勝てる戦いだっただからだ。明らかに口原がその魔人を圧倒していた。お前が汚い手を使うのは知っていたが、ここまでとは思わなかった」

「称賛感謝する。この調子でお前ら天使たちがつくった使人内閣は滅ぼさせてもらおうとする」

「ほざけ。今に貴様には神罰が下る」

「神だと？ 馬鹿を言うな、世界の創造主はこの俺だぞ？ いい加減、神話、伝説、伝承を改変・捏造するのはやめたらどうだ？」

「悪の化身めが！」

それきり、ガブリエルは何も言わなくなった。

第十一章 革命戦士・法務大臣葉千景子との戦い！

「俺の愛刀が………」

岩崎は二つに割れた木刀を見下ろし、呟いた。

「なんだこんなもの、今すぐなおしてやる」

すると、二つになった木刀が元通りになった。

「サタン、お前ってほんと凄いな。無敵じゃないか」

「下らんことを言っていないで、次はどうするか決める」

「そうだな。山鳩由紀夫を追いかける必要ならん。サタン、奴の居場所はわかるか？」

「ああ。ほらよ」

気がつくのと、岩崎は山鳩ら閣僚の前にいた。

「ここは大臣室だ。山鳩内閣の大臣は全員揃ってる。さっさと始末しろ」

「やはり来ましたか」

山鳩首相が口を開いた。髪をオールバックにしている。

「口原大臣では敵わなかったようですね」

「黙れ鳩ぽつぽ山鳩、お前のような真正極悪自虐反日極左売国奴どもには、みな死んでもらう。今日をもって主民党も山鳩内閣もおしまいだ！」

「ほほう。どうやらあなたには、私の友愛の心も通じないようですね。さて、参りました。どうしたものでしょう。ねえ、皆さん？」

「総理、このあたくしにお任せください」

葉千景子法務大臣が進み出た。

「キチガイ魔人、勝負よ！ あんたなんか、地獄の業火に焼かれて死ねばいいのよ！」

叫ぶやいなや、葉千は火炎瓶を岩崎目掛けて投げつけた。

「おっと、あぶねえ」

岩崎はとっさによけた。

「何が愛国魔人よ！ あたしはね、中央大学の学生だったとき、成田闘争に参加して機動隊員を火炎瓶でぶっ殺してやったのよ！ あんたが愛国魔人なら、あたしは筋金入りの革命戦士よ！ あんたもあの機動隊員のように、大やけどを浴びて死ねばいいのよ！ あたしは死刑廃止派だけど、あんたたち糞右翼や糞保守は別！ あんたたちは人間じゃない！ 魔物よ！ あたしの火炎瓶であんたも民自党も国家改造政党政神風も、みんな皆殺しよ！ 糞右翼・糞保守なんて死ねばいいのよ！ 死ね！ 死ね！ 死ね！ さあ、あんたもとっとと死になさい！」

葉千はどんどん火炎瓶を投げつけてくる。岩崎は火炎瓶を木刀で叩き落して器用に回避しつつ、徐々に葉千との間合いを詰めていった。

「おっほっほっほっほー！ よけているだけじゃないの！ あんた、芸がないわねえ！ おっほっほっほっほー！」

葉千は火炎瓶を投げるのが面白いのか、げらげらと笑い続けている。

「極左糞婆、油断したな！ とっつ！」

「何ですって！？」

岩崎がジャンプし、葉千の頭を叩き割った。

「ぐがっ！？」

革命戦士葉千は絶命した。

「とんだ火遊びクソババアだったぜ」

岩崎が葉千の遺骸に唾を吐きかけた。

「ほほう。歴戦の古兵・葉千法務大臣を一撃で倒すとは、なかなかやりますね。沢尾幹事長や口原大臣を倒しただけあります。しかし、あなたももう終わりです。皆さん、抹殺してあげてください」

「はっ」

山鳩の一声に、全閣僚が動き出した。

「一斉攻撃で、岩崎文太さん、あなたは即死です」

山鳩が宣言した。

第十二章 大臣室での死闘！

「この阿呆は俺が片づける！　くらえ！」

井亀静香郵政・金融担当大臣の二丁拳銃が火を噴いた。岩崎は超反応で何とか回避に成功した。

「俺は警察官時代、射撃の腕がよいと評判だったんだ。ガンマン亀の異名をとったほどにな！　死ね、低能エセ愛国者！」

またしても二丁拳銃が鳴った。

「俺はエセじゃねえ！　ホンモノの愛国者だ！」

岩崎は井亀に接近しようとしたが、原前誠司国土交通大臣がその前を阻んだ。原前は日本刀を抜刀して斬りつけてきたのだ。

「君の相手は井亀大臣だけではないよ！　はあっ！」

「くそっ！」

「私は下松政経塾というところに居た頃、居合を習っていたんだ。おかげで、こうして勘違い愛国テロリストを返り討ちにすることができるとうわけさ！　ていやっ！」

原前の斬撃を受け止める岩崎に、今度は管仁直副総理兼財務大臣が棒を叩きつけてきた。

「どこを見ている！　この管の棒術を受けてみよ！」

「ちいつ！ この不倫野郎が！ 日本人離れた名前の癖しやがつて！」

「私は日本人だ！ ふざけたこと言っんじゃない！ きいやあつ！」

管が奇声をあげてなおも棒で殴りつけてくる。岩崎はよけるので精いっぱいだ。

「くそくそくそくそ！」

刹那、岩崎の顔面に重たい衝撃が走った。田岡克也外務大臣の強烈なパンチが炸裂したのである。

「私は学生時代にボクシングを少し齧っていたんだ。そら！」

「くそつたれが！」

今度は岩崎の右足に激痛が走った。野平博文官房長官がテレビを投げつけたのだ。

「私は昔、大手家電メーカーのナパソニックに勤務していたのだ！ 家電の威力、思い知れ！」

野平は続々と家電製品を投擲する。

「ははははは。岩崎さん、どうしました？ 今日で山鳩内閣もおしまいなんじゃありませんでしたか？ 何というざまでしょうね。ははははは」

山鳩はひとり高みの見物を決め込んでいる。

「だ、黙れ鳩ぽっば！ 正義は必ず勝つ！」

「口だけは達者のようですね。さあ皆さん、とどめを刺して差し上げなさい」

「どうやら貴様の魔人もここで一巻の終わりのようだな」

天界より様子を窺っていた天使ラファエルが言った。

「さて、どうかな」

サタンはとぼけて見せた。

第十三章 森、小泉、安倍、麻生の参戦！

「おうおうおう。おもしれえことがおっばじまってんじゃねえか。俺たちもお仲間に混ぜてくれよ」

ショットガンを片手に、葉巻を口にした麻生太一郎前首相が現れた。

「麻生さん、何の御用ですか？」

山鳩が怪訝な表情をしている。

「私もおりますよ」

安倍晋二元首相が弓矢を手に行っている。

「何の御用だあ？ 愛国魔人岩崎なにがしが暴れているこのときを利用して、おめえら主民党のアホ面どもを殲滅しにきたに決まってるあ。ということ、死ねよ？ 日本版ナチス政党が政権政党になり、外国人参政権付与を推進する、このみぞうゆつの国難、この俺様たちが救ってみせるぜ」

麻生がショットガンを構えた。

「いかに元首相が二人とはいえ、この人数に勝てると御思いですか、麻生さん、安倍さん。いよいよ民自党も焼きが回ったようですね」

山鳩がにやにやと笑って言った。

「誰が二人だと言った？」

鉄球を手に、巨体を揺らしながら森喜雄元首相が姿を見せた。

「森さんまで。いったいあと何人出てくるんですか、民自党は」

山鳩がため息交じりに言う。

「私をお忘れではありませんかね」

長どすをもった小泉純夫元首相が登場した。

「何人出てこようが、先の総選挙で大敗した民自党に何ができるというの？ 笑わせないでよ。六法全書の角で頭をぶつけて死になさい！ はいやあああああああ！」

斜民党党首、島福瑞穂消費者・少子化担当相が嘲笑いながら、分厚い六法全書を民自党の四人に向けて投げつけた。しかし、四人とも軽々と避けた。

「それでもあんたは法律家かよ？ ま、ちょうどいい、まずはてめえからだ」

麻生のショットガンが轟音を鳴らした。島福の胴体に大きな風穴があいている。

「何なのこれは？」

島福は立っただけで死んだ。

「見たか、俺の腕は確かだぜ？　俺はオリンピックにも出場したことがあるんだ。・・・・・・御次は誰だ？」

麻生が満面の笑みを浮かべながら、葉巻を吹かしている。

第十四章 井亀静香、原前誠司死す！

「いったいどういうことだ？ どうして民自党の元首相が四人も突然現れたんだ？」

岩崎は事態の急展開に呆然自失としていた。

「俺が呼んだのさ。ありがたく思えよ、岩崎。この四人はみな、悪魔と契約を結んだ魔人だ。お前に加勢しに来たんだよ」

サタンが説明する。

「ここで会ったが百年目、小泉！ 郵政選挙の遺恨、この場で晴らさせてもらう！」

井亀が二丁拳銃を小泉に狙いを定めて撃ちまくっているが、小泉もさるもの、超高速で移動して巧みに回避しているため、当たらない。

「井亀さん、あなたもお年を召されて耄碌されたのでは？ 全然当たりませんよ、ふっふっふっ」

小泉が不敵な笑みを浮かべながら、井亀に向かって急接近していく。

「亀首爺、どこを見ている、お前の相手はこっちだあ—————
———」

「なぬっ!？」

井亀が小泉に気を取られている間に、岩崎が素早く井亀の背後に回っていたのだ。

「元警察官僚でありながら、暴力団四菱会から献金を受けていた汚職政治家、井亀静香、死ねっ!」

岩崎は振り向いた井亀の眼鏡面目掛けて、木刀を振り下ろした。井亀の顔がぐしゃりと潰れた。

「井亀大臣!」

その場に居た山鳩内閣の閣僚が一斉に声を上げた。

「おのれ! よくも井亀大臣を!」

怒り狂った原前が岩崎目掛けて突進を仕掛けてきた。

「岩崎君、よけてください!」

岩崎の背後に居る安倍の声が飛ぶ。岩崎は左によけた。

「ぐっ!」

原前の右膝に安倍が放った矢が突き刺さっている。

「皆さん、私の話を聞いてください! 私の家は代々長州藩士だったのです。原前君、あなたは居合を習っていたらしいけど、所詮君のような平民が習得したものなど、平民の居合術に過ぎない。私の

ような真の侍に勝てるわけがないのだよ」

言いながら、安倍は次々と矢を放っていった。原前の左膝、右肩、左肩に矢が突き刺さっていく。そのたびに原前は悲鳴を上げた。

「これで最後だ。さよなら、原前君」

安倍は右頬を歪めて笑いながら、矢を放つ。原前の喉笛を矢が貫通した。原前の喉からどくどくと鮮血が流れた。原前は声も立てずに死んだ。

第十五章 田岡克也、管仁直死す！

「井亀大臣ばかりか、原前大臣までやられるとは。皆さん、彼らを生かして帰してはなりませんよ」

山鳩の檄が飛んだ。

「お任せ下さい総理、我らが負けるわけがありません！ 民自党の元首相連中ども、私のパンチでいつもこいつも地獄行きだ！」

田岡が勢いよく駆けだしていった。

「うるさい奴だな。それでも食らって少し黙ってる」

森が勢いをつけ、鉄球を投げた。田岡のあごに直撃した。

「ぐがつ！」

田岡が痛みのために涙を流す。

「もういっちょ」

森が投げた鉄球は田岡の額に食い込んだ。田岡は額をへこませて、即死した。

「俺は稲早田大学のフットボール部に所属していたが、よくボールを飛ばす練習にこの鉄球を使っていたんだよ」

「田岡君の仇は私がとる！ とあああああああ！」

管が二メートル近くある棒を振り回しながら、民自党の四元首相に向かって走っていった。

「管さんは私が仕留めます」

小泉が長どすを構えて管と対峙した。

「おう、小泉さん、管退治はあんたに一任するぜ」

麻生が応じた。

「はあっ！」

管との間合いに達した小泉が気合を発し、棒に斬りつけた。

「なんと!？」

管お得意の棒がすっぱりと四つに切り離されてしまった。

「あの世でもお遍路してなさい」

小泉は管の首筋を長どすで斬った。どばつと血が吹き出、小泉は返り血を浴びた。管は口をパクパクさせ、落命した。

第十六章 官房長官・野平博文死す！

「管もくたばった。次はどいつだ？」

麻生は相変わらず葉巻を吹かしている。

「まさか管副総理までやられるとは。しかし、総理、御安心ください、総理はこの私が最期まで守り通します！」

野平が一步、進み出た。家電製品を手にしている。

「さあ、私の相手は誰だ！？」

「ちょっと待った！ 野平、お前の相手はこの俺だ！」

突然、がたいのいい男が現れた。

「貴様は、仁大田厚！？」

野平は明らかに困惑していた。

「どおりやあああああああ！」

仁大田が大声を張り上げながら、着ていたスーツとワイシャツを破り、上半身裸となった。

「もう俺は国会議員じゃないが、日本の危機とあつては、見過ごしにはできねえ！ 元プロレスラー、元民自党参議院議員・仁大田厚、日本のため、民自党のため、偽善的な天使の下僕たる主民党と山鳩

内閣を討つ！　ぐがあああああああああ！」

仁大田が叫びながら、野平に近寄って行った。

「お！？　おおお！？」

野平は驚くばかりであったが、かろうじて家電製品を仁大田に投げつけることができた。

「なんだこんなもん！　ふんっ！」

仁大田は投げつけられた家電製品をもともせず、素手で払い落とす。

「あああああああああああああ！」

仁大田の拳が野平に炸裂した。

「ぐあっ！？」

野平が悲鳴を上げる。

「ぢやややややややややや！」

今度は仁大田は野平の顔目掛けて蹴りを放った。見事にヒットし、野平の体は数メートル吹っ飛ばされた。野平はそれきり動けなくなった。首の骨が折れていたためである。

「の、野平官房長官！？」

山鳩の顔が驚愕に支配されていた。

「う、うわあああああああ!？」

戦闘を見物していた閣僚のひとりが、素っ頓狂な悲鳴を上げて逃げだした。それを見て、ひとり、またひとりと閣僚たちが逃亡していく。

「あなたたち！ どこに行くのです！ 逃げるんじゃない！」

山鳩の呼びかけもむなしく、とうとう山鳩ひとりが大臣室に残されることとなった。

第十七章 鳩使い・山鳩由紀夫vs鳥使い・山鳩邦夫

「山鳩さんよお、ひとりになっちまったな。どうするよ？」

麻生がにやついている。

「それがどうしたと言っんです？　あまり私をなめない方がよいですよ。はあああああああああ！」

どこからともかく、鳩の大群が現れた。その数、数百羽はいる。

「これが私の力！　私は鳩を自由自在に操ることができるのです！　鳩よ、敵前逃亡の裏切り者を皆殺しにしろ！」

鳩の大群が大臣室を後にした。

「どこに行くつもりだ？」

麻生が不思議そうな顔をしている。

「ぎゃあああああああああ！」

廊下から悲鳴が上がった。

「言ったでしょう？　私を見捨てて逃亡を図った裏切り者を鳩に始末させているのですよ。逃亡者、裏切り者には、死あるのみ！　魔人を前にして逃げるなど、あつてはならないことです」

廊下が静かになった。

「どうやら粛清は終わったようですね。次は、あなたたちです！
鳩たちよ、この者たちを襲いなさい！」

「ちっ！」

麻生が舌打ちし、ショットガンを構えた。そのときである。

「待て！ 兄よ、まずはこの私を片づけてからにしていたきたい」

山鳩由紀夫の弟、山鳩邦夫が姿を現した。

「弟よ。兄である私を倒すというのか？ 属する政党は違えど、血を分けた兄弟ではないか？」

巨漢・邦夫は首を横に振った。

「もはやそんな青臭いことを言っている場合ではないのだ、兄よ。
兄が推し進める外国人参政権は、この日本を解体せしめるもの。黙
って看過することなど、断じてできない。仮に兄弟が血で血を洗う
ことになったとしても」

「どうしてもなのか、弟よ」

「そうだ。兄よ、わかってくれ」

「ならば、もう構わん、弟よ、死ね！」

鳩の大群が一斉に邦夫を取り囲む。それを阻むように黒い動物の
大群が出現した。カラスである。

「兄よ、あなたが鳩使いなら、私は鳥使い！ 我は悪魔ラウムと契約を結びし魔人・山鳩邦夫！」

「鳥使いだと！？ 鳩たちよ、鳥もろとも弟・邦夫を滅ぼせ！」

鳩と鳥との死闘が始まっていた。鳩と鳥は、互いにくちばしで相手をつつき、体当たりを食らわせたりしている。

第十八章 首相・山鳩由紀夫死す！

麻生が鳩を狙ってショットガンをぶっ放している。

「みんな、邦ちゃんを援護しろい！ とにかくうじゃうじゃ沸いてやがる鳩を狙え！」

「おう！」

森は鉄球を投げ、安倍は弓を射、小泉は鳩を長どすで斬り伏せ、仁大田はパンチやキックを繰り出している。

「岩崎ナントカ、おめえもだ！」

「わかった！」

岩崎は飛んでいる鳩だけを叩こうとするが、鳥が邪魔になってうまくいかない。

「ちくしょう！」

岩崎が悪態をついた。

「ふははははははははははははははは！ どうです！ これが私の力です！ 元首相が四人束になったところで、現役首相の私に勝てるはずがないのです！ あはははははははははは！ さあさあ、皆さん、死んでもらいますよ！」

鳩の数が増えますます増加していった。

「どうですか？ 鳩の数を増やしてみました。皆さんは、ここで鳩の餌になってもらいます。はははははははははは！」

山鳩由紀夫は狂ったように笑い転げている。

「くそっ！ ここでやられてしまうのか！？ ここまで来て・・・」

岩崎は絶望に打ちひしがれようとしていた。

「いや！ まだ手はある！」

鳩に囲まれた邦夫が叫んだ。

「何をするつもりだ、邦ちゃん」

麻生が訝しげな顔をしている。

「これも日本のため、民自党のためだ。みんな、さようなら！」

邦夫が鳩を払いのけながら、由紀夫目掛けて突進し始めた。

「岩崎君とやら、私が道をつくる！ あとからついてきてくれ！
そして、兄を倒すんだ！」

「わ、わかった！」

「うおおおおおおおおお！」

叫びながら突き進む邦夫の巨体を鳩が包围し、くちばしで攻撃を加える。

（あと少しだ。あと少し）

邦夫の後を追う岩崎がそう思ったとき、邦夫が倒れこんだ。由紀夫のところまであと一歩というところだった。

「ははははははは！ 愚かな弟め！ お前は私の引き立て役に徹していればよかったんだよ！ あはははははははは！」

「どこを見ている！」

由紀夫の眼前に岩崎が飛来してくる。

「ば、馬鹿な！？ 祖父を首相に、父を外相に、母を日本有数の資産家にもち、東大卒の学者出身のこの私が、こんなところで敗れるはずがない。私は東アジア共同体を構築し、アジアのリーダーとなり、資本主義帝国アメリカを打ち倒す、この私が……。友愛宰相のこの私が」

「つべこべうるせえ！」

岩崎の木刀は由紀夫の頭蓋骨を叩き割った。由紀夫の頭部がへこみ、脳漿はまき散らされ、両目は飛び出ている。主民党代表、内閣総理大臣の山鳩由紀夫は死んだ。

「やったぞ！ やった！」

感極まった岩崎が思わずガッツポーズをとる。

「ついに山鳩由紀夫を倒したな、岩崎」

「サタン、お前のおかげだよ。俺はついに日本を救ったんだ」

「ああそつだ、お前は日本の救世主だよ」

第十九章 愛国魔人・岩崎文太死す！

「岩崎、遺憾ながらお前の役目は終わった」

「サタン、どういうことだ？」

「フンっ、わからぬか。こういうことだ」

サタンが鼻で笑う。突如、骨が折れる音がしたと思うと、木刀を握っていた岩崎の右手に激痛が走った。岩崎が木刀を手から落とす。

「何、しゃがる……」

森が鉄球を投げつけたのだ。

「うっ！」

左の掌を矢が貫通する。矢を放った安倍は残忍な笑みを浮かべている。安倍は岩崎の苦悶する顔を見て喜びながら、二の矢、三の矢を射る。安倍が放った矢は正確に岩崎の両太ももを貫いた。

「ぐぬっ！」

さらに岩崎の顔が苦痛にゆがんだ。

「ざまあねえな、岩崎ナントカよ。調子に乗っておいたするからさ」

葉巻をくわえた麻生が悠然とした足取りで岩崎に近付いていく。

麻生は岩崎の額にショットガンの銃口を押しつけた。

「これでおめえもしまいさ」

「な、なぜだ？ 麻生閣下、俺は日本のためを思つて……」

麻生がせせら笑い、言った。

「愛国魔人岩崎クンよお、俺たちや、別に外国人参政権が現実化したつて一向にかまわねえんだよ。日本が解体されるのなら、されたでいい。そうすりゃ、おめえのような自称愛国者・国士気取りのアホどもが決起し、大勢人が死ぬ。まあ、言ってみれば、おめえは余計なことをしちまつたつてことだな。おめえのせいで俺たちの計画が狂つちまつた。どうしてくれるんでえ、このどさんぴんがよお。自称天使を崇拝する自称使人・使徒なんぞ、俺たちが本気になりや、いつでもぶつ潰すことができるのさ。まあ、今回はおめえに便乗させてもらつたがな」

「麻生、貴様、保守政治家ではなかったのか？」

「おいおい、下流の癖にこの俺様を呼び捨てとは聞き捨てならねえな。俺はこれでも総理を祖父に持つ華族の出なんだぜ？ おめえのような下の下の愚民は、ただ俺たちを拍手喝采し、支持称賛していればいいのさ。それが愚民の身の程つてもんだろ？ 違うか？」

「日本をどうするつもりだ？」

「これから死ぬ人間には、関わりねえだろう？ そうだな、また戦争でも起こすかな？ 北朝鮮や中国とやりあうか？ そのときくたばるのはどうせおめえのような下民どもだけ。俺たちは生き延び、

またこの国の実権を握るといわけさ」

「貴様っ！」

「おしゃべりはしめえだ。あばよ」

麻生が引き金を引いた。銃声とともに、岩崎の頭が吹き飛び、辺り一面に脳漿が散らばった。愛国魔人・岩崎文太は死んだ。

最終章 死人二一ト・岩崎文太、自分が殺めた亡者どもと対峙する

岩崎文太は自分の死体を眺めていた。麻生たちは談笑しながら、大臣室から出て行くこうとしていた。

「これは、いつたい？ 俺は死んだのか？」

「そうだ。お前は死んだのだ、岩崎文太よ」

サタンの声が岩崎の耳にこだまする。

「サタン！」

「岩崎、悪いがお前を利用させてもらった。お前のおかげで日本に救う使人たちを数名片づけることができた。礼を言う」

「よくも俺を殺させたな！ サタン、出てこい！ 俺と戦え！」

岩崎の霊体は空を殴っている。

「無駄だ。お前のような愚民を相手にするつもりはない。どうしてこの俺が姿を現さねばなんのだ？ 笑止だな、岩崎」

「くそっ！ お前なんぞ崇めてやる！ 呪ってやる！」

「お前は哀れな奴だ。もうお前にできることはない。そもそも、人間に過ぎないお前如きに、魔王である俺が敵うはずもない。自覚したらどうだ、岩崎よ」

「くそ！ くそ！ くそ！」

「そんなことより岩崎、自分の心配をした方がいいぞ」

「もう俺は死んだんだ。今更、何を心配しろってんだよ」

「来たぞ」

「来たって誰が」

「岩崎・・・・・・・・」

突然、山鳩由紀夫が現れた。

「うおっ！？ お前は山鳩由紀夫！？」

「ざまありませんね、君も。麻生に殺されるところを見物させてもらいましたよ。痛快でしたね。本当にざまあみろという感想です」

山鳩由紀夫は心底愉快そうに笑っている。

「岩崎さん、あなたには恨みがあります。口では言いきれない恨みがね。この恨み、晴らさせてもらいますよ！ 皆さん、ここに我々を殺害した岩崎文太がおります！」

山鳩の掛け声に応じて、亡者どもが集まってきた。沢尾ガールズの田福衣里子、青森愛、中田美絵子、小田和美。沢尾一郎、口原一博、葉千景子、井亀静香、原前誠司、管仁直、田岡克也、野平博文がいた。他にも、岩崎が叩き殺した沢尾邸警備の警察官、沢尾の書生たち、主民党本部に勤務していた主民黨員、警備の守衛、国会の

衛視も集まっている。岩崎が最初に叩き殺した主民党の刺客もいる。

「よくも我々を殺してくれたな」

「う、うわあああああああ！」

岩崎はあどすさった。

「逃げられませんよ、岩崎さん。本当の戦いは、これからです！」

山鳩が満面の笑みを浮かべて、言い放った。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6229j/>

魔人二ート 平成天魔大戦

2010年10月10日11時21分発行